

# かとかり通信 第34号



発行日：令和2年5月15日 発行人：かとうファミリークリニック

## 開院3周年を迎えることができました

かとうファミリークリニックは5月15日に開院3周年を迎えることができました。

これもひとえに皆様のご支援の賜物であると感じいたします。これからも日々精進してまいりますので、よろしくお願い申し上げます。

さて1月のかとかり通信では、今年はオリンピック・パラリンピックイヤーで…と書きました。しかしこの数か月で状況は一変してしまいました。ちょうど20年前、私が研修医として総合診療内科に配属され、内科診療の基本として最初に教わったのは発熱患者さんのマネジメント＝感染症診療でした。20年後の今、感染症という領域がこれほど脚光を浴びるとは思いもしませんでした。そして目に見えない病原体が、世界や社会のあり方までも変えてしまうということは想像もつかなかったことです。

●感染症が感染症診療を困難にするジレンマ  
研修医時代の感染症診療で教わったことは、入念な問診と身体診察から得られる情報によって疾患の可能性を見定め、適切な検査を選択し、結果を吟味し治療を行うという、内科診療の基本でした。しかし新型コロナウイルスはその感染性の高さから、医療者も患者さんから遠ざからざるを得なくなりました。十分な見定めができていなければ、やみくもに検査をしてもその結果は意味を持たなくなり、むしろ混乱を招くだけです。感染症そのものによって感染症診療＝内科診療の基本を十分に果たせない、という状況は「聴診してなんぼ、おなかを触ってなんぼ」の臨床医には大変ショックな出来事なのです。

ゴールデンウィークはステイホームでDVDを観て過ごしました。

●3年B組金八先生 第2シリーズ(1980年)  
もう40年も前のドラマですが(私は高校時代に夕方の再放送で観ました、提供は名古屋地下街サンロード)、第1話から不登校・引きこもり問題(当時は「思春期心身症」という表現でした)を採りあげています。端役で風間杜夫が出ていたりします。老教師役の浜村純・久米明(先日96歳で亡くなりました)は滋味深く、嫌われ役の数学の乾先生や荒谷二中の教師は陰険な役回りに徹しています。生徒役では沖田浩之のオーラが際立っています。しかしなんと言っても23話以降、加藤優(直江喜一)と松浦悟(沖田)らが荒谷二中に乗り込んで放送室に立て籠もり、校長に落ちこぼれ生徒に対する理不尽な仕打ちを謝罪させ、その後警察に連行されるシーン、その迫真の演技・画面から放たれる熱量には何度観ても涙が出ます…これ以上は紙幅に余裕がありません、YouTubeでも観ることができますので是非ご覧になってみてください。

このドラマの中に金八先生(武田鉄矢)の有名なセリフがあります。

…我々は機械やみかんを作っているんじゃないんです、我々は毎日人間をつくっているんです。人間のふれあいの中で生きているんです…

●ソーシャルディスタンスはソーシャルクライシス  
「ソーシャルディスタンス」や「新しい生活様式」言葉で言うのは簡単ですが、金八先生が言うように、人間は人と人の関わり合いの中で生きています。ITが発達した現代とはいえ、Zoomでは得られない生のコミュニケーションが阻害されてしまう今回の事態は、社会性＝人間らしさの危機でもあるように思います。長引けば長引くほど経済面だけでなく、コミュニケーション不全に伴うメンタル不調が増えて来ないか、長期的な後遺症が心配です。

●共存共生～人間らしい社会生活ができる日がまた来ることを信じて

地球上には様々な生物が共存しているわけで、微生物とも共生していかなければなりません。そもそも感染症のみならず、天変地異や事故のリスクも抱えて生きていかなければなりません。もちろん科学の進歩や英知を結集して治療法や予防法を確立し、リスクを最小限にする努力は重要です。しかしその上で「ゼロリスク探求症候群」に陥らず、人と人とがふれあうことができる日々がまた来ることを信じて「正しく恐れ、しかし前進していく」ことが求められているように思います。



特定健診・がん検診  
6月1日より開始します  
ご予約承ります